



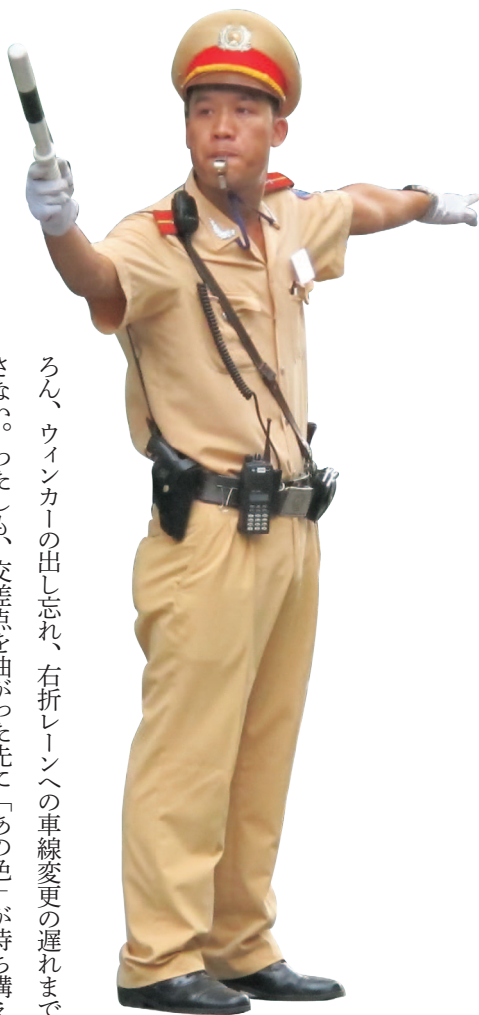
制服の世界
THE UNIFORMS OF THE WORLD
世界の制服

サッカー日本代表が二〇一四年ワールドカップ出場を決めた夜、サポーターの熱気で沸きかえる渋谷交差点に、巧みな話術で交通整理する機動隊員があらわれ、「DJポリス」として話題になった。場所は転じてベトナム、ハノイ。人、バイク、車、露店でこた返している街の喧噪のなかで、秩序の番人たちの「色」は、どのように機能しているのだろうか。

ハノイの街の秩序をつくる「色」

寺戸 宏嗣 てらと ひろつぐ
在ベトナム日本国大使館専門調査員

日本の街で警官にどれだけ出会えるだろうか？ベトナム・ハノイの街を散策すれば、すぐにかならず緑やらオレンジやらの警官の制服姿が目にとまるはずだ。二輪車であふれ、露店がさかんなハノイでは、警官自身による秩序維持が重要らしい。あるいは、街の喧噪がかれらの大事な商売相手なのかもしれない。わたしたち喧噪の一員にとって、その制服は日常的でありながら、しかも目を引く。



交通警察官。その色は妙に目立つ

妙に明るい

「交差点の真んかに行けばいいよな？」

警官の制服を撮りたいと申し出ると、こう言っただけですとたすたとバイクの群れのなかに陣取った。そして、制服をまとった身体、手にした白い警棒、口にした笛を駆使して信号機を補助し、通勤ラッシュ時の交通を整理した。違反取締りもかれらの主要任務だ。信号無視やヘルメット不着用はもちろんで、この妙に明るい色のおかげで、この警官たち本人にもちよつとした気安さと気紛れが許されはしないだろうか。路上駐車などの取り締まり現場で、警官と市民があたかも談笑するかのように交渉しているのを見ると、そんな勝手な想像にも一理ある気がするのだ。

闇夜に溶け込む色

ハノイの夜は早い。二十一時ごろまでは街の公園に多くの家族連れが集っているが、一時間後にはうってかわって人通りが少なくなる。食堂やカフェや電器屋の多くも閉店し、音と灯りが一気に乏しくなる。闇が濃くなると、機動警察の出番となる。かれらは四人一組、二台のバイクか一台のクルマで移動するのが基本形だ。夜の不審者にすつと近寄り声をかけるのが仕事。本当に危ない連中かもしれないから、単独行動はリスクキーだし、装備も万全にしておかなければならない。制服の色も、妙に際立つたりはせず、闇に溶け込む。



機動警察。四人一組で、それぞれに装備が異なる



婦人警官は朝のラッシュ時以外にはあまり見かけない



「ふつうの」警官。事件現場用と事務所用とは帽子、上着や靴、装備などに違いがある。写真は現場用



靴下も制服のうち

地区の巡回者

夕刻、ミニホテルのロビーでくつろいでいたときのこと。突然ホテルのマネージャーが受付の女性従業員から用意されていた封筒を受け取り、急ぎ足で表に出た。ホテル正面の路上には、バイクにまたがった中年男性。マネージャーはひとことふたこと挨拶し、封筒を手渡して戻ってきた。月一程度、こうやって地区の巡回にくるらしい。制服？もちろん着ていなかった。何者だったのか。

外国人は不審な行動をしがちだ。わたしも声をかけられたことがある。ほろ酔いで歩いていたら、かれらが近づいてきたことにまったく気づいていなかった。以来、わたしはその色を真っ黒だと信じていたが、昼間に見てみると完璧な黒ではなくオリーブ色だった。警察学校を出たばかりに見える若者でさえ、オリーブ色を身にまとうと表情が引き締まった。

ろん、ウインカーの出し忘れ、右折レーンへの車線変更の遅れまでも、見逃さない。わたしも、交差点を曲がった先に「あの色」が待ち構えていたりすると、ドキッとすると。交通警察だけの、オレンジっぽい制服の色だ。その色が目につくのは、日頃バイクを運転しながら自然と身につけた「リスク」回避意識のためばかりではない。妙に明るい色なのである。交通警察のオレンジ色だけでなく、「ふつうの」警官の緑色もそうだ。派手じゃないけれど、独特の存在感がある。生地はどこにでもありそうな布地だが、公安省お抱えの制服工場で何か特殊な染色がおこなわれているのかもしれない。どうだろう。きっとわたしたちだけの勝手な印象かもしれないが、黒や紺、あるいは白の制服に比べて少々厳格さや力強さに欠ける気がする。警官に